進之時、雖為社家違亂、依有先例方、附寺家潤色之處也。仍為支證之狀如件。

康應元年十月　日　　貞　慶　在判

元中七年　庚午
康應二年　京都
明徳元年　三月廿六日改元　紀元二〇五〇

正月廿五日。假掲

六六九

【須須神社文書】　珠洲郡

（寄）奇進

方上保高座宮天神下地之事

合壹段者在所大島名内介八作

右奇進意趣者、天長地久、兼又滋野清貞子々孫々繁榮成願、家門繁昌故也。仍奇進之狀如件。

明徳元年庚午正月廿五日　　滋野林太郎左衛門清貞　在判

（案ずるに明徳元年庚午は三月廿六日の改元なり。然るにこの文書正月にして既に明徳を稱するものは疑ふべし。）

閏三月十八日。足利義滿、山城北野社領石川郡笠間の地頭職を同社家に付せしむ。

六七〇

【北野神社目安以下色々事】

北野宮寺領加賀國笠間郷地頭職事

右依為闕所、去至德三年十二月廿五日、為法花八講令寄進訖。而號本主勤仕神役之間、下地入部以下閉之歟。爰今年二月、八講料足難澁之上者、於彼地頭職者、為一圓神領、社家可致其沙汰也。然則可令為二季八講祭禮（會脱カ）并三年一請料所狀、下知如件。

明徳元年閏三月十八日

從一位源朝臣（足利義滿）　在判

○

六七一

【北野神社目安以下色々事】

加賀國笠間郷地頭職事、任御下知狀之旨、可被沙汰付北野宮寺雜掌之狀、依仰執達如件。

明徳元年閏三月廿五日　　左衛門佐（斯波義將）　在判

前修理大夫殿（斯波義種）

四月十九日。幕府、加賀守護斯波義種をして、山城北野社領石川郡笠間の下地をその雜掌に沙汰付せしむ。

六七二

【北野神社目安以下色々事】

北野宮寺雜掌申、加賀國笠間郷事、就御寄進狀、如社家申者、當主領家八幡宮（石清水）也。而為地頭請所地、辨年貢之條、云八幡宮檢校以下狀、云御教書、分明也。早可被沙汰付一圓下地於北野雜掌、更不可有緩怠之狀、依仰執達如件。

明徳元年四月十九日　　左衛門佐（斯波義將）　在判

前修理大夫殿（斯波義種）

（明徳元年閏三月十八日の條參照。）

六月廿一日。足利義滿、石川郡笠間保の下地に對する山城石清水八幡宮雜掌と北野宮雜掌との爭論を裁決す。

六七三

【北野神社目安以下色々事】

石清水八幡宮雜掌與北野宮雜掌、相論加賀國笠間保事

右八幡宮雜掌者、領家分下地入勘之地之由申之。北野宮雜掌者、為地頭請所之旨論之。所詮於八幡所進建暦官符者、承久以前支證之間、對于地頭不是非之限者乎。其後不出帶公驗之間、胸臆之至也。至北野者、先地頭笠間伊勢守用光跡、當宮寄進也。爰用光出帶貞和三年八月日祠官連署狀、加同檢校法印朗清判形、并永和元年十二月日檢校曾清平等、同四年五月日檢校常清田中三代社務狀、請所之條分明上者、為地頭請所之地、毎年五百疋可沙汰渡八幡宮也。然則當保可為北野一圓神領也。次用光雖及訴訟、已本寄進炳焉上、二月八講料足難澁之間、重成下知畢。彼是所令棄捐訴訟也。者、下知如件。

明徳元年六月廿一日

從一位源朝臣（足利義滿）　在判

（明徳元年四月十九日の條參照。）